「トークの会」発言記録　＜「平和のための伝言」コーナー＞

2009.12.6

＊メモは、発言要旨です。また、発言時間に制約があったので、一部は「田辺九条の会」作成の記録集等から補強しました。発言者ごとの見出しは、事務局の佐藤が付けました。

＊文責：事務局　佐藤　誠

■　父の出征、機雷、不発弾、栄養失調

・・・・・・・・・電気も水道もない能登半島の村のこと等

石田サチヨさん（田辺九条の会）

昭和９年生まれで、今は田辺団地に住んでいますが、生まれは石川県能登半島。前は海後ろは山で、その頃、電気も水道もない暮らしでした。

もの心がついた頃、大人が「支那事変」とか言っていました。戦争が激しくなり、父も大きな幟（のぼりはた）旗とラッパに送られて戦場に向かいました。当時、私は三年生、弟を背負って学校へ、母は産婆の仕事で赤ちゃんが生まれるまで帰りません。集落の前の磯で何回も機雷が爆発し、地震のようなガラスも割れる程の揺れと音がしました。その後、終戦になって父が帰って来たことが嬉しかったです。食べるものが少なかったので、母が栄養失調になったこともあります。戦後、それとは知らず不発弾を持ち帰り危ない目にあったこともあります。

何しろ電気も水道もない暮らしをしてきたので、私が京都に働きに出て来て一番驚いたのは「水洗便所の水」でした。その時まで、「ペダルを踏むだけで水が飛び出す」なんて考えられませんでした。ラジオは、「箱の中から声がする」ので不思議に思ったものです。

これから、ずっとずっと平和でありますように願っております。

■　今春　２日通った　知覧の「特攻隊平和会館」

・・・・・・体験も振り返り「二度と戦争をしてはいけない」の思い

岡本　静男さん（田辺九条の会）

昭和４年生まれ、８０歳代になりました。「生活と権利を守る会」の活動をやっています。昨年はひどい目に遭いました。昨年発足した後期高齢者医療制度について、行政に対し不服審査を申し立て、年末に残念ながら却下されました。今後とも廃止にむけ、皆さんとともに運動を続けたいのでよろしくお願いします。

今年の春、鹿児島県の知覧にある「特攻隊平和会館」に２日通いました。私の従兄弟が陸軍特別攻撃隊靖国隊として出撃、レイテ湾で戦死しています。１８，１９の少年が「お母さん、さよなら、親孝行できずに済みません」と言って散っています。涙、涙の参観者もいました。６月には、従兄弟の５０回忌に預かった遺品を、その「特攻平和会館」に寄贈することも出来ました。私も、戦時中は学徒動員で工場に行っていました。世の中全体が、志願兵か何かに志願せなあかん空気でした。大阪の第一回目の大空襲で、一時、家族がバラバラになったこともあります。二度と戦争はしてはいけない、平和の内に生存する権利がある・・・私の思いです。ともに頑張りましょう。

■　一粒のキニーネを子供に譲って死んだ母

・・・・・・・・・・・罪を懺悔し教会を建てた元米軍艦長のこと等

樋口 一二さん（田辺九条の会）

沖縄の最南端、八重山群島の小浜島で生まれ育ちました。終戦の頃は、３つ４つでした。

私の家のすぐ前が学校で、その学校が軍の駐屯地になっていました。高射砲や機関銃で米軍の小型戦闘機と、よくドンパチやっていました。まだ小さかったので、恐いとも思わず石垣に登ってゲームを見るようにしてみていました。父親は兵隊にとられて、大分や熊本に行っていたようです。終戦近くになると、軍も食料の支給が無かったらしく、家ごとに植えてある、バナナ、みかん、茄子等が何でもとられ、終いには鶏や豚までばくられました。私たちも、桑の葉も含め何でも食べました。「すいとん」は記憶にありません。

その内にマラリアがはやり沢山の人が亡くなりました。ついに私の母もマラリアに罹り、朝鮮の兵隊さんが日頃の償いにと思ったのかキニーネ（マラリアの特効薬）を１粒持ってきてくれました。しかし、母は「私は手遅れだから」と言って私と１歳の弟に半分ずつ与えました。母が高熱による寒気でガタガタ震うので、これを止めようと布団等その辺のものをかぶせた上から乗っかかって押さえつけていた事を覚えています。その母も２～３日後には死んでいきました。

まだ幼かったので何も分かりませんでしたが、戦争の悲惨さは本島に渡ってから知ることになりました。それは、沖縄戦で艦砲射撃をしていた艦長の話を聞いた時のことです。日本軍が島民を塹壕に押し込んで焼き討ちにしている現場を見た艦長の部下が、気が狂い何人も自殺した、自分もと思ったが思いとどまったというのです。教科書問題で焦点になっている事実そのものです。元艦長は、沖縄に教会を建て自分たちの罪を懺悔し、戦争のない世の中を築くため、沖縄に生涯を捧げたいということでした。

■　「九条の会」のお手伝いさせて頂きます

・・・・・・・生きる権利と平和求め「中国残留孤児」の私も

林　睦さん（田辺九条の会）

私は、中国残留孤児です。日本の移民政策で満州開拓団に加わっていた両親が敗戦で逃げる途中、ソ連軍の空襲に遭い父母と生き別れになってしまいました。私は、幾度か人の手を経て、６歳の頃中国人の養父母に引き取られました。

日本政府は、長年私たちを探そうともせず昭和３８年の特別法で戦死扱いに。同時に日本国籍も失いました。１９８１年、一時帰国で実の父母に会うことができました。５年後にやっと本格的に帰国できました。言葉で言い表せない喜びでした。けれども日本政府は、私たちに外国人登録を押し付けました。何とも言いようのない悲しい思いがしました。私たちは、裁判で老後の生活保護を訴えてきました。生存権と国の責任をはっきりさせるためです。その結果、昨年から少し制度が変わりましたが、満足できるものではありません。

多くの命と悲惨な体験から、生きる権利と二度と戦争をしないとうたった憲法を手にしました。この憲法を変え、民主主義や福祉を切り捨て、軍事優先の国にする動きがあります。これに断固反対し、微力ながら「九条の会」のお手伝いをさせて頂きます。

■　「お国のために死ぬのは当たり前」でした

・・・・・・・兄と弟が戦死、もう繰り返したくない悲しい思い

米沢　末さん（北部９条の会）

今は８４歳、終戦は二十歳で迎えました。生まれ育ったのは、南アルプスのえらい山の中です。重病人がでると竹の筒に入れた米を振って、「早くよくなって。白いまんまを食わせるから」と言い聞かせるとにっこり笑って間もなく息を引きとる、という風習がありました。学校の教育は、「お国のため」一色でした。毎年、学芸会の劇では、「家のことは心配するな。お国のために立派に死んどいで」と言って子供を送り出す母親、「死んでも進軍ラッパを放さなかった」兵隊さん、「爆弾三勇士」等が定番でした。「愛国百人一首」というのもありました。そんなだから、「戦争に行って死ぬのは当たり前」とみんな思いこんでいました。今の子供が、みんな「サッカー選手になりたい」と思っているのと同じようなものです。

我が家でも、弟が予科練に志願して「片道ガソリンの飛行機」に乗り、戦死の公報を受け取りました。兄も４人の子供を残してフィリピンに行き、音信不通になりました。あとで、行軍について行けず「置いていかれた」ことが分かりました。そんなとき軍は「自決用の弾」を残すようにしていたこと、その辺で大きな決戦があったことから、そこで死んだと思われます。残された者が、死にものぐるいで４人の子供を育てました。しかし、父はすっかり落ち込み、飯を食うときも、寝ても、兄はどうしているかとよく泣きました。以来、「あの子がいつ帰ってきてもいいように」と、どんなに寒い夜も大戸を開けて寝ました。風で少し音がしても、「帰ってきたのでは」と起き出していました。

戦争はこりごりです。もう、誰にもこんな思いをさせたくありません。

■　けしからん、遺骨収集もまともにしない政府

・・・・・・・・・・・・・・・・・・　戦争のない国、九条を守りたい

御藤英夫さん（北部９条の会）

昭和１７年生まれ、６７歳になります。大阪西淀川区にいましたが、大阪の大空襲で焼け出されたので、おやじの里である岡山へ疎開し小学校へ入るまで過ごしました。おやじは、軍人としてインドネシアに行っていました。印刷のベテラン工員で、現地で宣伝のビラづくりをしていたようです。幸い、おやじは無事帰国し、仕事の都合で大阪の鶴橋の木賃アパートに入りました。そのころ、米だけの飯は食ったことがありません。今なら食えたもんやない「切り干し大根入りの飯」なんかを食わされた覚えがあります。

母親の姉さんの夫は、未だに遺骨も帰っていません。まだ、何百万の遺骨が現地に眠っています。まともに収集もしない政府はけしからん、と思います。

これからも、戦争のない国、九条を誇れる国ということで、九条を守りたいなーと思っています。

■ 終戦後、４年間 中国解放軍と闘った私

・・・・・・・・・戦争は人殺し、憲法を守ることこそ大切

横瀧常行さん（北部９条の会）

昭和３年生まれ、もうすぐ８２歳になります。

今の林さんの話を聞いて、ずいぶん苦労をされたんだろうなーと思い、また感動もしました。私も中国で終戦を迎えました。私のいた内蒙古から大方の人は帰国しましたが、僕は中国に残りました。「日本は空襲で丸焼け、外地から何百万人の引き揚げがあれば食べるものも無いだろう。若い俺らが帰るのはおかしい。我々が残れば、軍国日本復活の時には中国に進出するときの手引きが出来る」というのが、そのときの思いでした。２５歳まで生きるとは思わず、２０歳過ぎで死ぬのは当たり前とも思っていました。結局、終戦後に軍に入隊、日本軍現地上層部と蒋介石軍との取引で我々が残され、毛沢東率いる解放軍と４年間闘いました。

当時の教育と社会が私のような軍国少年を作った経過を考えると、今の「国旗掲揚や君が代斉唱強制」等の動きに大きな不安を感じます。戦争は人殺しであり、昔の教育は少し極端に言えば「殺人鬼を作る」ことでした。そうさせないためには、今の憲法を守ることがその根幹的なことです。私も、微力ながらこれからも９条を守る活動をしていこうと思っています。

■ いい思い出のない疎開先、蛙も食べました

・・・・・・・・・・「九条の会」これからもがんばります

山本恭子さん（新婦人の会）

健康ケ丘に住んでいます。

私の小学校入学式は、疎開先でした。学校では、「疎開の子」とものすごくいじめられました。母親が付き添って学校に連れて行ってくれたりしましたが、その母より早く家に帰ったりしていました。疎開先は叔父さんの家でしたけど、お米も不自由で、勝手にすくって食べないように米びつのお米に「米の字」が書いてありました。それで、蛙なども捕って飢えをしのいでいました。

大阪の天王寺に帰ってからは、曲がりなりにも給食のパンがあったり、配給もありました。駆虫剤の「まくり」を飲まされたり、シラミ駆除のＤＤＴを頭からかけられたりの経験もしました。

二度と戦争を起こしてはいけないと、「九条の会」に参加しています。これからも引き続き頑張りたいと思っています。